

個人情報保護のため、本指導案の取り扱いには、くれぐれもご留意くださいますよう、お願いいたします。

言語／国語科学習指導案

主体性を育む幼・小・中連携の教育 公開研究会 17会場（国語教室）

小中接続分科会 言語グループ 国語 公開2

豊かな伝え合いをめざして－「読むこと」の小中連携カリキュラムづくり－

「少年の日の思い出」を主体的に読む ～三つの活動で共有する（中学校1年生）

平成24年1月21日（土）

東京学芸大学附属竹早中学校

1年A組（男子20名 女子20名 計40名）

指導者 森 顕子

1 小中連携の視点から

（1）「主体性」を育み、「豊かな伝え合い」を目指す

本研究においては、「主体性」を育み、「豊かな伝え合い」を目指すことがその主眼であり、様々な言語活動を行うことで、この二つを実現していこうと考えている。

今年度は、「読むこと」－文学的学習系列に焦点化しているが、学習目的を意識した活動を積み重ねることで、生徒は、小学校からの既習事項である学習方法を主体的に次の単元に活用して学習を進めていけるようになり、本校国語科の願う生徒像が実現すると考える。

そこで本実践では、班による場面の読解の発表と学習課題について取り組む過程での読みを深め、さらに3つの言語活動を共有することで、再度自分なりに作品をとらえなおすことをねらった。

①主体性を発揮することを期待した場面

- ・単元のゴールを明示したことで単元を通して主体的に関われる
- ・発表を行うために場面の読解、学習課題について主体的に話し合う
- ・発表の工夫をするために既習の学習方法を主体的に取捨選択していく
- ・3つの言語活動を共有することで、作品にとどまらず主体的に学習を広げていく

②豊かな伝え合いに繋がることを期待した場面

- ・発表を行うための班の中での話し合い（学習課題の設定など）
- ・発表を通しての疑問や学習課題の解決のために班とフロアとの話し合い
- ・単元終了時の感想の交流

（2）言語グループ（国語科）連携カリキュラムとの関連

本実践は、小中接続分科会言語グループ国語科において本年度作成を行う「読むこと」の小中連携カリキュラムに位置付くものであり、「主体性」を育み、「豊かな伝え合い」を目指している。前段階である第2ステージにおいて、「読みを深める方法を経験し身に付ける」子どもの姿を目指しているが、それを受けて、第3ステージでは「経験した方法を活用し、設定した課題に沿って学習を計画する」子どもの姿を目指している。小学校段階で学習してきた中で身に付けてきた、大小様々な活動を主体的に取り込んで学習を進めていくことを意識させたい。

また、実践対象となる生徒は中学1年生であるところから、竹早地区幼小中連携研究会における発達段階の区分でいうと、第3ステージ（小学4年生後期～中学1年生：集団との関わりの中で自分とは何かを意識する時期）の最終ステップ（ステップ6）となる。すなわち集団の中で自分の考えをしっかりと持つことから、主体的に学習に関わり、さらには自分らしさとは何か、自分の中で再構築していくことを目指していく、次の第4ステージ（中学2年生～3年生：集団の中で自分らしさを追究する時期）を見通して授業を設計していきたいと考えている。

◇第3ステージ（ステップ6）における文学的文章教材の読みの学習で重点的に指導する事項

- ・文章中の言葉の意味を理解すること。
- ・文章の構成や内容、描写や表現の特徴、効果をとらえること。
- ・文章を読んでいくことを通して、自分のものの見方や考え方を広くすること。

上記について本実践では、はじめの2点について第1次に加えて、第2次の発表学習に取り組む過程でおさえしていく。そして第3次の活動を通して3点目を具現化したい。

2 単元について

(1) 本年度の単元構成－文学的文章系列－

本学年の生徒は、文学的文章系列の教材については教科書（学校図書「中学校国語1」）の教材を中心として、中学校入学以来、次のような作品を学習している。また、「★」は、教科書外の作品を教材として位置付けたものであり、「◎」が、稿者の実践である。

① 「雲」◎	山村暮鳥	4月実践
② 「朝のリレー」★◎	谷川俊太郎	4月実践
③ <春の詩5編>★◎		5月実践
④ 「二十年後」	オー＝ヘンリー	5月実践
⑤ 「ふる場の散髪」◎	椎名誠	6月実践
⑥ 「字のない葉書」（「ごはん」★）◎	向田邦子	7月実践
⑦ 「兄やん」	笹山久三	9月実践：教育実習生
⑧ 「ぬすびと面」	吉橋通夫	10月実践：教育実習生
⑨ <秋の詩5編>★◎		11月実践
⑩ 「シェークVSバナナスプリット」	ウルフ＝スタルク	11月～12月実践
⑪ 「少年の日の思い出」◎	ヘルマン＝ヘッセ	12月～1月実践
⑫ 「霧笛」★	レイ＝ブラッドベリ	1月～2月実践

これらの12の教材をそれぞれ単元化し、それぞれの学習目的に合わせて以下のように言語活動を設定した。

例えば、①②③⑨は通年を意識した詩の学習であり、音読、朗読、群読といった音声活動と、自作の詩をつくり、交流し合う創作活動を設定した。また、⑤⑥は、「家族」を中心に据えて読みを進めた。⑤は父から息子への想い、⑥は娘から父への想いを本文からすくい上げ、班活動を通して意見の交流を行い、それぞれの想いを読み深めた。そのために、⑤は発展学習として、「岳物語」「続岳物語」を読書として展開し、⑥については、<東京大空襲の夜>について描かれた「ごはん」を加えて読むことで、父親の人物像と娘である作者の、父や家族への想いをさらに補足した。

(2) 単元及び単元設定の理由

①教材名

「少年の日の思い出」ヘルマン＝ヘッセ作・高橋健二訳

②単元設定の理由と教材観

「少年の日の思い出」は、中学校の文学教材として長く採録されている。生徒は、同世代の主人公である「ぼく」の、行動に自分の姿を投影し、共感を持って読むことができる。ちょうど自我に目覚めはじめ、感情のコントロールが困難になってきている時期であり、常識的な道徳や価値を越えた行動は、それまでには持つことのなかった、新しい価値の世界におけるものであるともいえよう。すべてを忘れて一つのことに打ち込む姿は、生徒には、現在あるいは未来の自分の姿である。

自分自身が見つけ出し選び取った魅力ある「一つのこと」に打ち込み、自分の思うところに従おうとすればするほど、常識的な価値を持つ世界との狭間に置かれてその苦悩は大きく、どうあっても自らの心と向き合わざるを得ない。

真人間らしく生きていくとはどういう事であり、少年時代の生き方がその後の人生にどのような影響を与えるのか。この教材の価値は、生徒は共感する一方で、すぐには解決できない困難な課題を擁している点にある。

本実践においては、物語を4つの場面に分けて、それぞれの場面について2班ずつ担当し、班ごとに発表を行う形をとった。現在の場面を第1場面、コムラサキのエピソードまでを第2場面、エーミール家でヤマユガの標本を盗もうとして壊してしまったところまでを第3場面、謝罪が受け入れられず、自分の標本を押しつぶすラストまでを第4場面とした。

物語を4つの場面に分けて、それぞれの場面について2班ずつ担当し、班ごとに発表を行った。現在の場面を第1場面、コムラサキのエピソードまでを第2場面、エーミール家でヤマユガの標本を盗もうとして壊してしまったところまでを第3場面、謝罪が受け入れられず、自分の標本を押しつぶすラストまでを第4場面とした。

第1場面においては、額縁構造であり、外枠が現在であり、内枠が過去となっていることをまずおさえる。つまり、現在が過去を包括しているという構造であり、現在の場面の情景描写は、客の思い出の世界に入っていく入り口である。また、「もうけっこう」「闇」といった過去との繋がりを示す表現も見られ、読み手が再び書斎へ戻ってくるためのものともとらえられる。

「わたし」は、「客」から聞いた思い出を作品として通して語ることで、現在までを見通した上で「客」の少年時の視点で述べられている。つまり、「客の思い出」は「わたし」によって再構成され、「客」はそれを読者として受容したとも言える。

第2場面においては、「ぼく」のチョウに対する熱情と、「ぼく」と「エーミール」の人物設定についておさえる。エーミールは、模範少年であり、それは悪徳であると述べられ、本心を明かさず、一方では相手の抗弁を許さない形で相手を攻撃する「不気味なこども」であるとされているが、エーミールの性格はぼくが説明しているので客観性はないこと、ぼくのエーミールに対する評価の揺れがあることも気づかせたい。その上で、エーミールとぼくの関係性から、なぜぼくはコムラサキをエーミールに見せたのか、エーミールはぼくに対してどう思っていたのかといったことに繋がる。

第3場面では、単純に「ぼく」を悪とし、「エーミール」を善とすることも、安易な盗みへの共感とすることもないようにしていく。ヤマユガは、「不思議な蝶」であり「最高の美の象徴」である一方で、「ぼく」にとっては「宝」から宝「物」と変化していることにも注目させたい。いずれにしても、作品の中心は、「わたし」の現在の姿をあらわすものとして過去の思い出を語るという形をとっていることから、「ヤマユガ」をめぐる出来事にあるのではなくてその出来事が現在持つ意味、「思い出」にあると考えられる。つまり、「少年の日を思い出として語る客」に「現在に至る自らの苦悩を打ち明けた客」という姿を重ねた上で読むことになる。

第4場面では、謝罪を受け入れられないことで、自らチョウをつぶすという行為に生徒自身も焦点化していく。つぶしたときの「ぼく」の思いとして、熱情が打ち砕かれた悲しみに耐えきれなかったこと、自分の浅はかな行動が美しいものへの熱情を汚した贖罪の思い、熱情のあまり自分をコントロールできなくなる恐ろしさを感じる中で、誰も罰してくれないので自ら罰するしかないという苦しみなど様々読むことができる。

母も、罪は盗んだこととしてのみとらえており、美しいものを破壊したという罪はわからず、ぼくを本当には理解していない。また、エーミールの「軽蔑」は、人間を値踏みしての軽蔑ともいえる。「蝶の命」を生き物としてみないで、冷然と値踏みするということは、収集の本質であり、先述した宝「物」に通じるものがある。この物語の底には、「ぼく」も「エーミール」のいずれも自分の思いからだけで他者に対してしていることがあるだろう。また、神学校の中退、弟ハンスの自殺といった作者であるヘッセ自身の生涯のエピソードもあわせて読むことで、この作品の理解の一助となる。

(3) 単元計画

①学習目標

○主体的に取り組み、発表・交流を通して登場人物の心情を読み深める。

【C読むこと(1)アウエ】

○作品を自分なりにとらえなおして活動に表せる。

【C読むこと(2)アウ】

②単元計画 全9時間(本時:第7時)

第1次 作品の内容をおおまかに把握する。【2時間】

◎3通りのゴール(言語活動)を提示し、読解後に一つを選択して取り組むことを伝える

1朗読発表会

・朗読を通して相手に伝えたり、エーミールや母の心中を言語化したりする

2作家を通して作品を読む

・作家(ヘルマン=ヘッセ)の生涯や、作家の他の作品からあらためて

「少年の日の思い出」を読む

3「少年の日の思い出」のキーワードを決めて、別の物語と重ねて読む

・キーワードから別の作品を探し、紹介する(比較読みなど)

例:「深い後悔」が読み取れる別の物語を探し、共通しているところを比べて読む

○通読・初発の感想・疑問(ワークシート①) **資料**

→ 個々に学習課題を設定する

○作品構造の確認(ワークシート②) **資料**

→ 登場人物、場面を確認する

第2次 場面ごとの読解を班で発表し、学習課題について話し合う【4時間】

○担当場面の決定(ワークシート③)

→ 学習課題を共有し、班で分担を決める

○場面の読解(各班模造紙2枚にまとめる)(ワークシート④・⑤) **資料**

→ 話し合い・作業(冬休み) → 発表 → 話し合い

(ホワイトボードの活用)

3分	出席確認（前時の確認 進行係） ＜前＞ 全体進行2名（各班1名）	
6分	① 10人（2つの班）音読	＜フロア＞
4分	② 先発班 発表	① 席は前を向いたまま
4分	③ 後発班 発表	② 質問メモ（色カード1）
6分	④ Q Aタイム（フロアの担当を決めておく、 発表班は相手のカードを持って移動 → 保留Qの書き出し どこかで解決していたらそれを伝える	③ 質問メモ（色カード2）
6分	⑤ 保留Qの報告確認 発表班	④ 質問メモを元に発表班の 担当者と話し合い【班隊形】
15分	⑥ 全体で話し合いたいことの話し合い （ホワイトボード+板書）	⑤ 全体で話し合いたいこと 班 （ホワイトボード、記録用紙）
1分	⑦ まとめ	⑥ 全体で話し合いたいこと 班・個人
5分	⑧ 学びと感想（カード白）	
		* 回収 ・ 色カード1、2、白 ・ 記録用紙

第3次 活動を通してのまとめ【3時間】 本時

- ゴールの活動をそれぞれに決定する
→ 個々の希望に基づき班をつくり、話し合い、発表分担を決める
- ゴールの活動の発表とコメントの記述 → 発表、コメントの交流
- 単元を終えての感想・「少年の日の思い出」とはどんな作品だったのか

3 生徒の実態

読書することが好きな生徒が多く、国語への関心が男子に高いのが特徴である。他学級と比較すると、やや全体的につぶやきや発言が少ないが、それほど臆することなく行える。知的好奇心も高く、授業へは挙手の有無に関わらず、集中して行えている生徒が多い。全体的に書くことには抵抗が少なく、意見や考えをしっかりと書ける生徒が多い。また、話し合い等の活動への取り組みはまじめであり、熱心に行う。

この学年は、附属竹早小学校からの進学者が半数弱、附属大泉小学校からの進学者が20名、残りは一般受験により入学した生徒から構成されている。

4 本時（7／9）

（1）学習目標

① それぞれの活動について、班の話し合いを通して内容を深める。

② 発表に向けて既習の学習方法を用いてさらに工夫する。

【C読むこと(1)アウエ】

【C読むこと(2)アウ】

（2）本時の評価

学習目標①②のいずれも、発表を含めた授業時の生徒の反応と、提出されたワークシートで行う。

	教師の意図・予想	時間	主な学習活動	指導上の留意点
導 入	・ 前時までの学習の流れと今日からの活動の流れを確認させる。	3 分	出席確認（呼名）	・ 事前に、ホワイトボードのセット（ホワイトボード2枚、ペンセット、記録用紙2枚）と★ワークシート、学びと感想カードは、国語係に各班の机の上に置かせる
		2 分	① 前時のまとめ ・ 第4場面の進行係により話し合った内容について簡潔に確認する	
展 開	・ 資料や事前の取り組みを提示し合いながら発表に向けて話し合えるだろう ・ 話し合う中で、情報を補足したり助言の必要性を感じてくるだろう。 ・ 全員が冬休みの課題としてゴールの3つとも調べたり考えたりしてきているところから、どのゴールについてもアドバイスできるだろう。 ・ 前時までは、質問を解決するためであったが、学習形態として、担当者が各班を回り、自班に戻ることは経験しており、円滑に運べるだろう。 ・ Aは拡散的であるが、Bでは焦点化された形での聞き取りが行えるのではないか。 ・ 各班の進行状況を共有すると共に、アドバイスが活かされていることを確認することで取り組みへの意欲にも繋がるだろう	1 1 分 (4分)	② 3つのゴールごと(班ごと)に話し合う ・ ホワイトボード1に経過を書く ・ 掲示されているパネルも活用する	・ 班隊形をとらせる ・ ゴールをイメージした話し合いを進められるように助言する ・ 進行状況の確認 ・ ③④⑤の流れの確認 ・ 話し合って決めたことや今考えていること、欲しい情報やアドバイスを発表させる ・ 班で手分けをして、落ちがないように各班を回らせる ・ 質問があれば班員を探して行わせる ・ 話し合いの状況と共にどんなアドバイスを得たのかについても発表させる
		(3分)	* 班長集合	
		4 分	③ 途中経過を発表者が発表する ・ 全班、ホワイトボード1を黒板前に置く ・ 聞いているフロアの他の班はメモを取る	
		2 2 分	④ アドバイスタイム A 別チームから ・ 各班の担当者が青カードを持って他チームの班を回り、アドバイスを情報を得る	
		(4分)	◇ 朗読チーム	
		(4分)	◇ 作家チーム	
		(4分)	◇ キーワードチーム	
		(5分)	・ 青カードをホワイトボード2に集約する	
		(5分)	B 同チーム他班から ・ 自班のホワイトボード2を机の上に置き同チーム他班のホワイトボードを見に行く	
		4 分	⑤ 今日の学習の成果と課題を発表者が発表する	
ま と め	・ 本時の活動を内容と方法の両面で振り返ることで次時の取り組みに向けて主体的に考えるだろう。	4 分	⑥ 学びと感想（白カード）を書く * ワークシート大小、記録用紙、青カード、白カードを、班ごとに回収する	・ 隊形を戻させ、授業内容と学習方法についての両面について記述させる

★ワークシートの内容

* 朗読チーム

- ・場面 P L
- ・その場面を選んだ理由
- ・タイトル
- ・補った言葉や文について
→どんな解釈に基づいているのか
- ・どのように朗読するのか
→どんな解釈に基づいているのか
- ・分担

* 作家チーム

〈班ごとに共通〉

- ・作者について必要な基礎情報
- ・この作品に関連していると考えられること
- ・分担

〈個別〉

→自分が興味を引かれたところ

* キーワードチーム

- ・キーワードの選定とその理由（複数可）
- ・同じ作者の作品だけでなく、違う作者の作品との比較読み
→この作品の何を読み深められたのか
- ・分担

■座席表

1 年 A 組 4 0 名 （男 2 0 名 女 2 0 名）

作家 1		朗読 1		キーワード 1	
34	27	21	15	8	1
35	28	22	16	9	2
		朗読 2			
36	29	23	17	10	3
作家 2				キーワード 2	
37	30	24	18	11	4
		朗読 3			
38	31	25	19	12	5
作家 3				キーワード 3	
39	32	26	20	13	6
40	33			14	7